

人にやさしい居住空間づくり

社会福祉子ども学科 大島千帆

日本の木造住宅の寿命は概ね 30 年と言われています。耐用年数が過ぎ不具合が生じるとリフォームや建て替えによって対応する場合や、住み続けることが難しくなり転居を余儀なくされることも少なくありません。住宅を取得するのが 30 代、40 代であった場合、なかなか将来の生活をイメージすることは難しいのですが、高齢になってから高齢期の生活に対応したリフォームを行おうとしても、水回りが動かせない、あるいは取り除くことができない構造体があり間取りが変更できないといった問題が起こります。こうした問題を防ぐためにも、建てた当初だけでなく将来の暮らしやすさも見据えた視点も必要です。

このように時間軸の変化に対応できる可能性を持つ住宅は、国外でも必要性が指摘されています。イギリスの住宅設計基準の一つである Lifetime Homes¹⁾ は住宅の将来のバリアフリー化に対応できる住宅の整備を目指したものとと言えます。また、オランダでは、幼少期から高齢期まで暮らし続けられる住まいとして図 1²⁾にイメージ図を示した「生涯住宅」というコンセプトを打ち出しています。

年月が経てば、家族構成やライフスタイルも変化します。現在、国も推進しているように、これからは住宅の寿命を延ばし長く暮らし続けられる住まいが求められています。そして、幅広い年代、世帯や生活の状況の変化に対応できる住まいの需要がさらに伸びていくかもしれません。

人に優しい居住空間づくりの一つの観点として、生涯住宅や Lifetime Homes の考え方を取り入れながら、安心して暮らすことのできる住まいに必要と考えられる点を挙げたいと思います。紙幅の都合上、ここでは主なものについて挙げています。

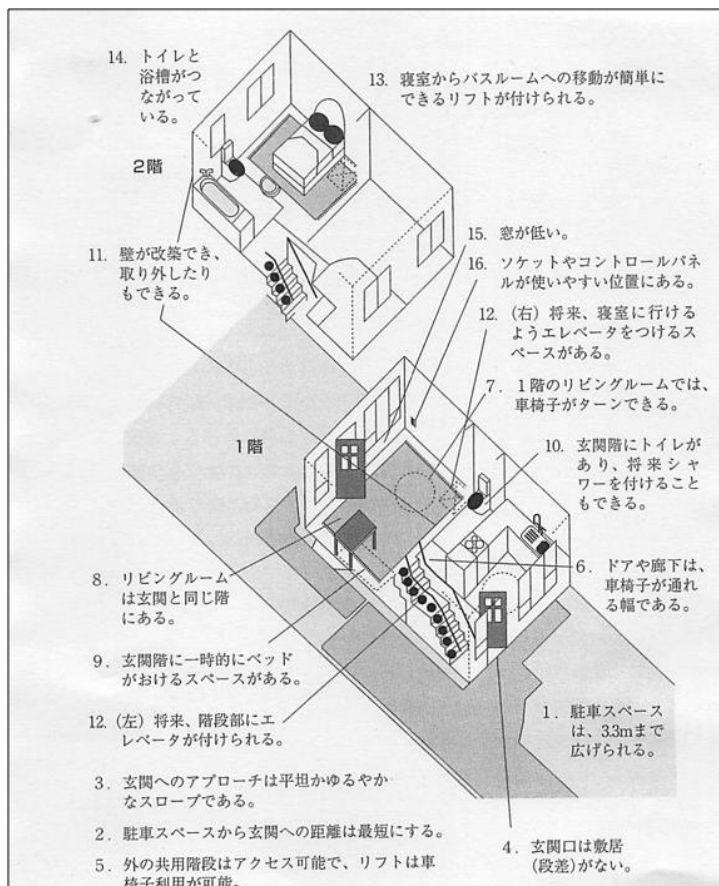


図1 「生涯住宅」の特徴

玄関へのアプローチ

- 道路・駐車場から玄関ポーチまでスロープや手すりが設置されている
- 駐車場は、ベビーカーや車いすを使用する場合でも車からの乗り降りがしやすいように広さや移動経路を考慮する

玄関

- 玄関ポーチは雨に濡れにくいように底をつける
- 玄関の間口は 85 cm以上確保する
- 段差は低く抑えるようにする
- 将来に備えて、手すりを設置する可能性のある場所には手すり用の下地材を入れる
- 腰掛け椅子が設置できる広さを確保しておく
- 暗くなりがちなので十分明るさが得られる照明を設置しておく。

廊下

- 車いすでも通れる幅にしておく（目安としては 80 cm以上）

トイレ

- 扉は引き戸にし、廊下に対して並行に設けると車いすでの出入りや介助者が入れる幅が確保しやすい。小さい子どもがいる場合は、指が挟まらないようカバーが必要な場合も。
- 手すりが取り付けられるよう下地材を入れる
- 暖房器具がおけるスペースは確保しておく
- 滑りにくい床材とする。

洗面・脱衣室

- 洗面・脱衣室から浴室へは段差を設けないようにする
- 手すりが取り付けられるよう下地材を入れる
- ヒートショック対策として暖房器具の工夫をする

浴室

- 介助が受けられる広さを確保する
- 乾きやすく滑りにくい床材にする
- 高めの椅子を使用した場合でも使いやすい設備とする。

水回り（トイレ、洗面・脱衣室、浴室）全般

- トイレから洗面・脱衣室、脱衣室から浴室に移動しやすい一体型の造りだと将来介護が必要になった場合は使いやすい
- ヒートショック対策として、暖房等の工夫のほか、各部屋から北側の廊下を通らずに行けるような場所に設置する方法もある

リビング・ダイニング

- 明るさや風通しの、眺望を確保できると良い（家族が集まる部屋のため）
- 照明器具は明るさを調整できるものが良い（高齢になると眩しく、あるいは暗く感じることもある）

その他設備

- キッチンのコンロは、安全装置がついているコンロ、点火や消火の有無がわかりやすい表示やスイッチのある機種を選ぶ
- 主な生活空間が 1 階と 2 階にまたがる場合、将来的にホームエレベーターの設置ができるよう 1 階と 2 階の収納の位置を同じ場所にするなどスペースを確保しておく

注) ヒートショック: 急激な温度の変化による血圧の変動により身体がダメージを受けること。心臓に負担をかけ、心筋梗塞や脳卒中を引き起こす場合がある。

文献

- 1) 丹羽太一, 丹羽菜生: 体験的ライフタイム・ホームズ論. pp.206-207, 彰国社, 2016
- 2) 松岡洋子: エイジング・イン・プレイス (地域居住) と高齢者住宅; 日本とデンマークの実証的比較研究. p.90, 新評論, 2011